

二〇一八年の歌書 佐佐木頼綱

前回の続きで、今回は二〇一八年刊行の歌書について記したい。昨年は優れた歌書が多かった年なのではないかと思う。

・谷岡亜紀著『言葉の位相―詩歌と言葉の謎をめぐって』

昨年の歌書で私が一番面白かったのはこの本だった。混沌とした著者の歌柄とは異なり、よく整理された優しい文体で修辞や仮名遣い、韻律、比喩、フィクション、〈殺し〉といった現代短歌のトピックを書き下し、「合わせ鏡論」や「短歌ひびきの論」といった歌論を現代に再提示している。連載時は気が付かなかったが本書は心の花の後輩へ、後進の歌人たちへ宛てられた啓蒙書なのだろう。扱っているテーマの一つ一つが大きく、多岐に渡っているため簡単に紹介することは叶わないのだが、個人的には「佐佐木信綱の〈新しさ〉」が面白かったので少し紹介したい。「中庸」「穏健」と評されることが多い信綱がいかに新しい表現を模索し、実験的作品を詠んできたかを作品を上げて追っている。『思草』期の作品の絵本的なメルヘンさやファンタジー、映像や視点の展開が『新月』期にどう発展したか、またそれらの作品の先に前川佐美雄の存在を描き出している。私の本はアンダーラインだらけになってしまった。

・田中教子著『覚醒の暗指』

「短歌往来」での連載で口語短歌に一石を投じている田中の歌

書。三章に分かれており一章は連載を軸とした時評的内容、二章は一章の論拠となる茂吉論、三章は資料という形で構成されている。口語短歌への「過剰な称賛に不信を抱くことがある」、「今日の若手の歌の多くには「詩」がない」というのが田中の主張である。論拠として提示される茂吉の技工、作歌意識は非常に刺激的だった。茂吉と比較された時、現代短歌がどれほど自立することが出来るのかは疑問だが、古典を含めた相対的視点の中に自意識や自分の作品を置いて捉え直す必要性はあるのだろう。

また「斎藤茂吉の短歌芸術は、のちの前衛短歌に強い影響を与え、そこから現代に流れ続けている」と前衛短歌のきっかけを茂吉に辿っている部分も新鮮に読んだ。

心の花に関わる歌人についての名著も二冊刊行された。

・古谷智子著『片山廣子―思ひいづれば胸もゆるかな』

「歌壇」に連載された「片山廣子ノート・胸もゆるかな」に加筆しまとめた一冊。歌にたどる廣子・散文と翻訳にたどる廣子・書簡にたどる廣子・場所にたどる廣子の四部構成で歌集が二冊しかない片山廣子の人物像と情熱に迫る。三部の芥川龍之介との書簡は古谷によって初公開された資料。関東大震災に衝撃を受け廣子が「震災のすべての表現を封じた」部分など、何を詠い何を詠まないか、現代歌人に通じる部分があり興味深く読んだ。

・内野光子著『齋藤史『朱天』から『うたのゆくへ』の時代

齋藤史が自身の全歌集を編集した際に未収録、もしくは改作した作品に焦点を当て、史の作家性を探っている。膨大な資料と共に時代背景を提示した上で、女性歌人の作品や真意を、現代の女性歌人が探つてゆく。